



中高生とともに差別と闘う

蒔かぬ種の芽は出ない

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



蒔かぬ種の芽は出ない

二〇二三年春、中学を卒業した子たちとたわいもない話をしていたとき、ふと三年前の出来事を覚えていたことが分かり、胸があたりたかくなりました。

三年前の二〇二〇年春。新型コロナウイルスにより、全国一斉に臨時休校。その「せい」で夏休みはほぼなくなり、暑いなか登校する毎日が続くことになりました。思い立った私は、せっかくだから、と先生方に一つの提案をしました。毎日おこなっていた朝の学習を取り止め、八月六日だけは全教室で「広島平和記念式典」を観よう、と。

ヒロシマから遠い地で、原爆への意識が高いとは言えません。毎年中継されていて、「敢えて観る」という話も聞かれません。個人的には機会があれば観せてきたし、話もしてきました。だから、こんないい機会はない、と思ったのです。

八月六日、朝。何も言わずとも、その厳粛さゆえか、子どもたちは静まり返って教室の映像を食い入るように見つめます。八時十五分直前、「参列者の皆さまはご起立ください」と、会場参列者に向けてのアナウンスが流れると、子どもたちは会場参列者でもないのにその場で立ち上がります。そして、「黙とう」と言われると、静かに黙とうをはじめました。その一部始終を見ていて、嬉しい気持ちも、静かな感動となつて押し寄せてきました。

機会がある限り、毎年この日は

式典に参列してきました。そのたびに、この場に子どもたちを連れてこられたら、と思い続けてきました。この厳粛さを感じてほしいのです。新型コロナウイルスの「おかげ」で、オンラインではありますが平和記念式典に参加することができました。卒業した子たちは、そのことをちゃんと覚えていたのです。種は蒔いてみるものです。

修学旅行の「行き先」

新型コロナウイルス感染症が5類となり、社会経済活動が戻りつつあります。しかし、元に戻らないといけないことや、元に戻れないこともあります。新型コロナウイルスやロシアのウクライナ侵攻などによる世界情勢の不安定化は、物価高をまねきました。これはまだまだ元に戻りそうもありません。それは旅行業界にも反映され、修学旅行にかかる費用が、コロナ禍以前に比べ割増しています。結果、それまで平和学習に絡めて訪れていた沖縄を断念せざるを得なくなってきました。行き先を変えればいいじゃないか、という声が聞こえてきそうですが、そこで懸念されるのが、その「行き先」です。

私が小学時代の担任は、戦争体験のあるおじいちゃん先生でした。折にふれ、戦争体験の話をしてくれました。私たちの世代が、戦争体験の話を通じて先生から聞いた最後の世代でないかと思えます。そんな私たちの世代が、修学旅行

先を頑なに、ヒロシマ、ナガサキ、オキナワへと向かわせました。そんな流れのなかにいた若い現場教員も、修学旅行を通して平和学習にふれてきたわけです。

しかし、現在の情勢がそれを一変させました。私たちの世代は、定年退職を迎えつつあります。この先も、平和学習の必要性和大切さは守られていくでしょうか。行けないなら「行き先」を変えればいいじゃないか、が平和学習を遠ざけはしないでしょうか。

人権・平和の塾

教育現場で働く者として、子どもたちの生活のなかで「経済」について懸念するのは、その暮らしぶりもありますが、それよりも、「だから学力を上げよう」と、学力に追い立てる空気感の方です。無論、旗を振っている本丸は、国であり、文科省です。学力が大切でないとは言いません。ですがその結果、もっと大切な学びから目を背けざるを得ないような状況に追い立てられているように感じるのです。

なぜ学ぶのか、と子どもたちに問うことがあります。多くが、「高校に行くため」と答えます。ではなぜ高校に行くのか、と問うと、多くが「大学に行くため」と答えます。なぜ大学に行くのか、と問うと、「いい仕事に就くため」と答えます。いい仕事とは、と問うと、「給料のいい仕事」と答えます。つまり子どもたちのなかではつきり

と、学力と経済力は結びついていて、経済最優先の思想にどっぷり浸かっているということなのです。経済を蔑ろにしていると言っているのではありません。私にとっても、生きていくだけの経済は必要です。ただ、学力や経済が最優先となれば、結果として他を貶めていることを知るべきだと思えます。まだまだ「誰一人取り残さない」社会とはなり得ていないのですから。平和学習も人権学習も、学力最優先という政策によりバランスを欠いています。しかし世の中は、SDGsを含め、発想の転換、価値観の転換に迫られているように思えます。経済最優先で奇跡的にもいえる急成長を遂げた高度経済成長。そのひずみとして切り捨てられた市井の人々。社会的弱者に「寄せがいく社会。臭いものに蓋をし、知っているのに知らないふりをする社会。本当は自分事なのに、他人事と処理し、見て見ぬふりをする社会。そんな社会問題を深掘りし、中高生とじっくり人権について考えられる場と機会が持てないかと、昨春、「人権こども塾」を立ち上げました。次回からその様子について、少しずつ紹介できればと思います。

これまで守り抜いてきた先人の声を消してしまわぬように、今を生きている私たちが未来を担う子どもたちの芽をつぶしてしまわぬように、目にも鮮やかな新緑の若葉が、これからも力強く芽吹いていくように。